都と文学

——長安と奈良を中心に——

孫久富

一、はじめに

みなさん、こんにちは。寒さの中をお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。今日の演題は「都と文学」ですが、本題に入る前に、私事といいますか、わたくし個人の経験を少し触れさせていただきたいと思います。

日本政府のご招待で日本文化、文学の研究者として、麗しき環境に恵まれる皆さんのお国にやって来ましたのは、一九八七年、指を折って数えれば、すでに十九年の歳月が流れてきました。振り返ってみれば、まことに感無量でございます。

実は、私が最初に日本を訪れましたのは、一九八四年でございます。当時、著名な女流作家山崎豊子氏の「大地の子」の取材通訳を終えまして、桜満開の四月に、日本政府のお招きで中国全国の各大学から集まった日本語教員らとともに、山紫水明の日本列島に足を踏み入れました。リムジンバスから降りて、私の目に入ってくるのは、世界屈指の大都会・東京の燦然繚乱な景色でした。林立する摩天楼、縦横する高速道路、鮮やかな看板……、その繁栄ぶりに驚き、日本民族の勤勉さと旺盛なエネルギーに思わず尊敬の念を抱くと同時に、どこか圧迫されて息苦しい思いも致しました。結局、日本の各地を廻りました後に、旅の疲れが癒され、落ち着きを取り戻したのが、やはり古都の奈良で、山に取り込まれた三笠山温泉に泊まった時でした。歴史の香りを嗅ぎながら、寺院の晩鐘を聞き、温泉に浸かって夜半の月を眺め、吉野の曠野を覆い被せる穏やかさと長閑さに、私が魅せられたのです。つまり日本古典文学の研究にたずさわる私にとって、一番魅力を感じた場所は、東京のような近代的大都会ではなく、古都の奈良なんです。千五百年前に、日本の古代人はよくもこの風水のよき場所を選んで都を造ったなあと感心しました。この山水に恵まれ、霊気に満ちあふれる地に日本文化の原型が作られ、数多くの文化人、文学者が育まれていったんです。奈良のことを褒めますと、会場の後ろに座っているうちの所長・鈴木先生は微笑んで喜んでいます。実は鈴木先生が東大寺の横に豪邸を構え、奈良公園の霊気を吸いながら成長して

著名な和歌研究者となり、そのお父さんもまた奈良の風物を描く有名な画家なんです。まさに「霊地より賢者がいずる」というわけで、羨ましきの至りでございます。

ここ数年、海外研修で毎年、母国の中国に帰りますが、首都北京の町の急変に目を見張るものがあります。高速道路が縦横し、天を衝くような高層ビルがあちらこちらに建てられています。都市の建設が一時、政治家の誇る業績にもなるということで、首都に限らず、中国各地に於いても町の建設が競い合うように急ピッチで進められています。つまり都市の造築と経営が経済発展の象徴になると同時に、それを伴っう交通の渋滞、環境の汚染、伝統文化の破壊、資金の浪費などの問題も噴き出しています。そこで、我々の生活基盤である都市の建設と経営は如何にすべきか、どういうような理念で行うべきか、またどのような町作りをしたら、文化伝統がよく保たれ、かつ我々の生活がより便利になり、我々の生活環境が一段と美しくなるかが、今日の都市建設が直面している課題であります。但し、今日の話はこのような都市建設の問題を議論するのではなく、講座の題目は、「都と文学――長安と奈良を中心に」というのですから、話は当然古代に遡って、日本と中国の古代都城の造営、その造営に潜まれている思想と文化の交流を中心に、比較文化、比較文学の視点からアプローチして参りたいと思います。

かつて明治時代に、詩人の土井晩翠が東京音楽学校の依頼を受け、懸賞応募用のテキストとして作詩し、瀧廉太郎が作曲した有名な「荒城の月」という歌の一段目は、次のようになっています。

春高楼の　花の宴
めぐる盃　かげさして
千代の松が枝わけ出でし
昔の光　いまいずこ

春の高楼、花の宴、めぐる盃といった風物は、仙台の青葉城の過去の栄光を表し、「千代の松が枝わけ出でし　昔の光　いまいずこ」は、城を取り囲む自然風景は変わらないけれど、青葉城はすでに荒れ果てて、昔の栄光がもうどこにも残っていません。荒城に対する切ない哀愁が悲しいメロディーを伴って我々に伝えてきます。まさに歌の結びにあるように、

天上影は　変わらねど
栄枯は移る　世のすがた
うつさんとてか　今もなお
ああ荒城の　夜半の月。

「荒城の月」という歌の素晴らしいところは、人々の感動と涙を誘う歌詞とメロディーの美しさだけでなく、われわれに「時代の移り変わりに

よる都の栄枯盛衰の歴史、人間万事の無常さ、つまり『平家物語』の冒頭に書いてある「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きがあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を表す」という道理を教えています。

遡りまして、万葉時代に奈良都の繁栄ぶりを次のように詠んでおります。

あをによし　奈良の都は　咲く花の
にほふがごとく　いま盛りなり（万・巻三・三二八）

太宰府の次官である小野老朝臣の歌ですが、その意味は「あをによし奈良の都は、咲き盛る花の輝くように、今盛りである」と。つまり地方に身を置いて、常に京都の奈良を恋しく思い、奈良の都は今花のように栄えているという称賛を以て「望郷の念」を表しているのです。しかし、都には盛りもあれば、荒廃もするものなんです。次の歌は荒れ果てた都を見て悲しい心情を詠んでいます。

古の　人にわれあれや　ささなみの
故き京を　見れば悲しき（万・巻一・三一）

ささなみの　国つ御神の　心さびて
荒れたる京　見れば悲しも（万・巻一・三三）

この二首の歌はいずれも高市連黒人の歌で、近江の旧堵を見て、万感が胸に迫って、荒れ果てた旧き都を見れば悲しい。

日本では「都」に関する歌が実に多い。『万葉集』には「みやこ」という語彙が用いられる歌だけでも三十数首にのぼります。都は人々のあこがれの場所で、一国の政治、経済、文化を象徴する中心的な存在です。従って文学の創作も大体「みやこ」を中心に展開されています。要するに、「みやこ」は文人の溜まり場で、文学の発信地とも言えます。

今日の話題は、「都と文学」ですが、出だしに土井晩翠の歌と万葉の歌を引用したのは、ほかでもなく、これらの歌は私の話の内容を凝縮しているからであります。つまり古代における都の造営と隆盛、そして時代の波に呑み込まれて没落の道を辿る都の歴史、特に日本古代の造都思想と大陸文化との関連を、文学作品を通して皆さんと一緒に検討して参りたいと思います。

一、造都の歴史と造都思想

都、中国古代では「京師（ジィンス）」と呼ばれ、今では「首都」と呼ばれています。日本では古代の「みやこ」を学術用語としては「宮都」と呼ばれてい

ます。歴史地理学者で、現在奈良女子大学文学部の教授である千田稔先生によれば、「宮都」という用語は亡くなられた歴史学者・岸俊男先生の造語であって、「宮室・都城」或いは「宮殿・都城」の略語です。「宮室、宮殿と呼ばれるのは、天皇の居住空間を中心とする空間であるのに対して、都城はそれをふくめてその外側に広がる都市空間を意味するものと理解することができる」と千田稔先生が解釈されています。この宮殿と都城からなる「みやこ」は、従来より、政治、経済、文化の中心または中枢として機能し、国の政治と文化の象徴的な意味を持つものだと言えます。従って、宮都の造営と経営は、歴代の支配者に重要視され、国家政治のカナメであることはいうまでもありません。

世界史に登場する都市の一番古いものに、大体紀元前三千年頃までのエジプト、メソポタミア、或いはインダス川流域の都市ですが、東洋においては、中国と日本の都造営の歴史も悠久たるものだと言えます。

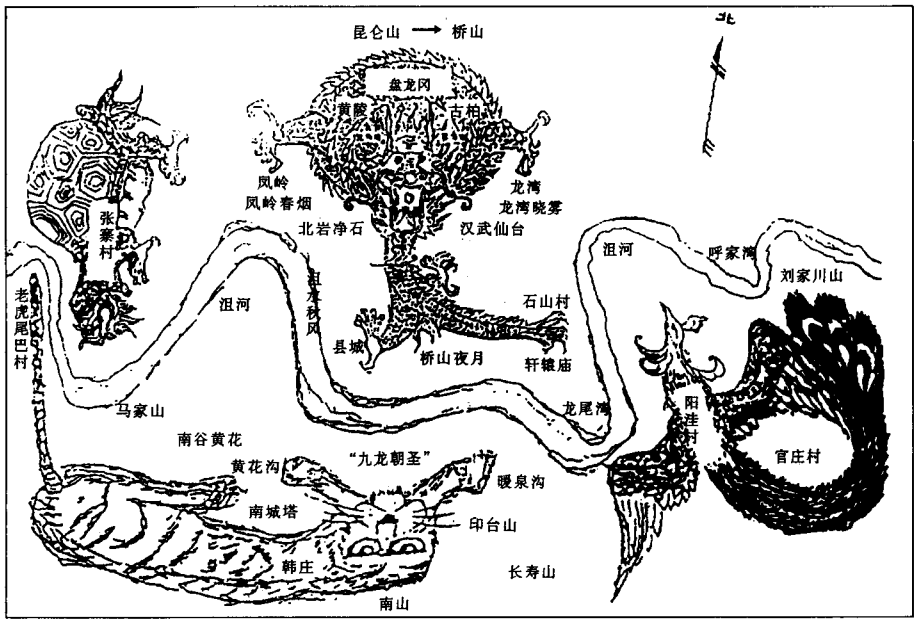
中国では、前漢の武帝の時代に編集した『淮南子』という書物の巻一「原道訓」につぎのような記述があります。

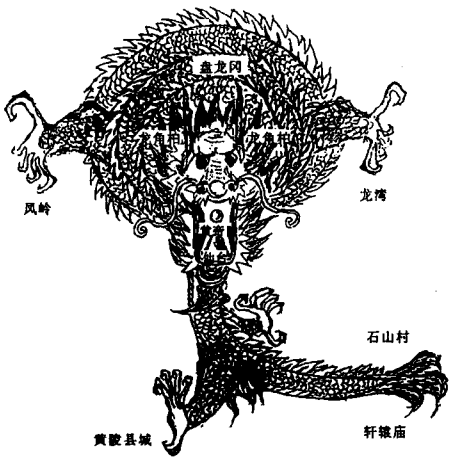
昔者夏鯀作三仞之城、　昔、夏の鯀、三仞の城を作るに、
諸侯背之、海外有狡心、　諸侯これに背き、海外狡心有り、
禹知天下之叛也、　禹、天下の叛くを知るや、
乃壊城平池、散財物、　乃ち城を壊ち池を平げ、財物を散じ、
焚甲兵、施之以徳。　甲兵を焚き、これに施すに徳を以てす。
海外賓伏、四夷納職。　海外賓伏し、四夷職を納る。

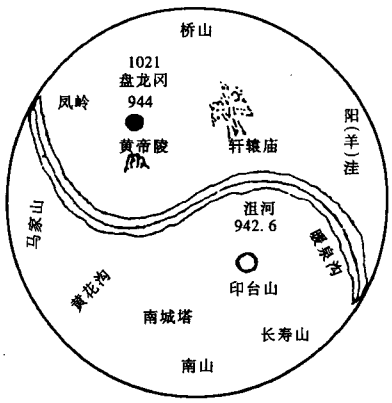
即ち「むかしのこと、夏の鯀が三仞（一仞は八尺。ここでは九仞の誤写）の城を築いたところ、諸侯はそむき、国には狡猾の心を生じさせた。禹は天下のそむくことを知り、そこで城を壊し、堀を埋め、財宝を散じ、武器（かぶとやよろい）を焼き、道徳思想を施した。すると、遠い国も服従し、夷狄も貢ぎものを奉るようになった」と。この記述で解りますように、夏王朝の時代から、中国ではすでに「都城」を築いたのです。そこから数えれば、都城の建設はすでに四千年以上の歴史があると言えます。

日本の場合はどうでしょう。『後漢書・東夷伝』の邪馬台国についての記述「有城柵・屋室」「居処宮室・楼観、城柵皆持兵守衛」によれば、卑弥呼の時代に邪馬台国では、すでに「宮室」、「楼観」、「城を取り巻く城柵」などを有する立派な「みやこ」を築いたのです。もし伝説中の神武天皇の畝傍橿原宮から数えれば、日本の宮都の建設も、二千数百年以上の歴史があり、かりに六世紀の半ば頃（五二六年）に飛鳥京の原型と言われる「磐余」に宮を移した時から数えてもほぼ千五百年ほどの歴史を持っています。世界の都造営史においてもけっこう歴史の長い方です。その点では、充分に誇りを持つべきです。

一方、都の栄えと衰えは、そのまま王朝の興亡を象徴するものですから、歴代の帝王はいずれも都城の建設に力を注いで、都城を政治、経済、







黄帝陵区负阴抱阳图

亢亮・元羽編著『風水与城市』百花文芸出版社　1999年より

軍事の拠点として営んできました。司馬遷の『史記・夏本紀』によれば、禹以降の十六人の王様は、勢力を拡大し、よりよい環境を求めるために、前後十数回にわたって遷都を行っていました。その場所はいずれも今の潼関の東、黄河の南北両岸に散らばっています。「潼関」といえば、陝西省（秦）、山西省（晋）、河南省（豫）という三省が合流するところにあります。その南は秦嶺山脈を控え、東南には谷の険が有り、北には渭水と洛河という二本の河が流れています。中国古代の都、例えば西周の豊（現在の西安の戸県）、鎬（現在の西安の長安県）、秦の都咸陽、漢、隋、唐の都長安、いずれもこの関中地方に築かれたのです。つまり中国の最も古い都城は山に取り囲まれ、水の恩恵を受け、かつ重要な戦略的な意味を持つ場所に築かれたわけで、都の造営には政治情勢や支配者の

都合と戦略のほかに、地理環境と風水の良し悪しは、その決め手となります。これがいわゆる風水学です。風水学は中国の古代人が都市、宮殿、邸宅、墳墓等を造営する際に、自然と人間との関係を軸に、自然生態や地理環境が人間に与える影響等を重視して発明されたもので、後に陰陽五行の思想や占卜易説等と結びつけて系統化された理論体系です。今の視点で説明すれば、即ち地質地理学、生態学、景観学、建築学、倫理学、心理学、美学等を綜合した古代の建築・造営学です。古代ではこれを「堪輿」といい、『漢書・芸文志』の子部五行類の著書録には『堪輿金匱』（十四巻）というのがあり、もっぱら風水方位を説く本です。

中国では、風水学が最初に運用された例は、陝西省の黄陵県にある黄帝陵です。

司馬遷が書いた『史記・五帝本紀』によれば、黄帝、字は軒轅（けんえん）。かれは徳を修め、軍備を整え、諸部落を統一し、農業、牧畜業、漁業を発展させて、中国初代目の支配者、即ち天子になったわけです。その黄帝が亡くなった時に、陝西省の「橋山」というところに埋葬されました。史書には「黄帝崩、葬橋山」と記されています。その橋山あたりの地形（前頁の図をご参照）を見てみますと、山のふもとに沮水河というS形の大きな川が流れ、河の南岸に印台山があり、北岸に盤龍岡があり、この二つの山は八卦太極図の「陰陽魚」の両眼になっています。黄帝陵の位置はちょうど河の北岸の日当たりのよい場所、即ち盤龍岡の上を選んで築かれています。周囲の山は「四霊」（龍、虎、亀、鳳）で名付け、即ち東に青龍、西に白虎、南に朱雀、北に玄武という構成になっています。これが風水学を運用して中国で造った古墳の最初の例であります。古墳に限らず、中国古代の宮都建設は、いずれもこの風水学に基づいて行われていったのです。

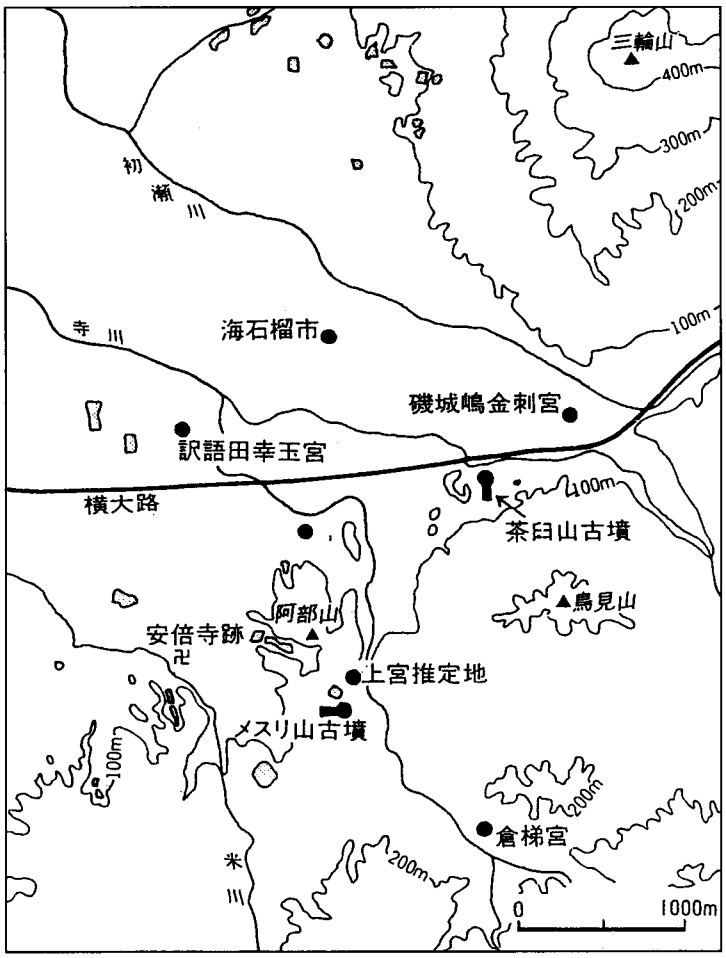
それでは、次に日本古代の都城を見てみましょう。

日本の都城の原点といわれる飛鳥、飛鳥の原風景が残されているのは、「磐余」という場所です。天香具山の北東から桜井にかけてのこの地域は、当時、大体鳥見、谷、安倍地域から橿原市の香久山あたりまでと考えられます。その磐余のあたりにも古墳が多く、また有名な稚桜神社があり、この場所は神功皇后の宮跡だと伝えられています。その地図をみますと、

磐余の右には初瀬山、上には笠山、左には三輪山、下には多武峰、山と山の間を大和川、初瀬川、荒井川、狭井川などの川が流れて、中国の陰陽五行及び風水学に基づくならば、磐余を含む飛鳥地域は山と水に恵まれる大変風水の好いところであります。『日本書紀』神武天皇己未年の春二月二十日の条に

夫れ磐余の地、旧名は片居、亦は片立と曰ふ。我が皇師の虜を破るに逮り、大きに軍集ひて其の地に満めり。因りて号を改め磐余と為す。或いは曰く、「天皇、往に厳瓮の糧を嘗したまひ、軍を出して西を征ちたまふ。是の時に、磯城の八十梟師彼処に屯聚居たり。果して天皇と大きに戦ひ、遂に皇師に滅されぬ。故、名けて磐余邑と曰ふ」といふ。。

と記されています。即ち磐余の地の元の名は、片居（かたい）または片立（かたたち）といいます。天皇軍が敵を破り、大軍が集まってその地に



磐余付近の地図

桜井市観光情報サイト　遺跡・文化財
http://www2.wagamachi-guide.com/sakurai/index2.asp

溢れたので名づけて磐余としました。またある人がいうのに、天皇がむかし厳瓮の神饌を召上られ、出陣して西片を討たれました。このとき磯城の八十梟師がそこに兵を集めて天皇の軍隊と大いに戦ったが、ついに滅ぼされました。それで名づけて磐余邑（いわれのむら）というわけです。

この記述から見れば、磐余は軍事の要所で、邑は殷の時代の「都」の名称で、即ち「都市国家」という意味です。日本の都の原型、飛鳥の前の時代をつくった場所は、この磐余というところで、そこが山に取り囲まれ、水に恵まれる風水のよい場所であることは、地図を見れば一目瞭然です。

磐余のあたりに多くの万葉歌碑が造られています。その中で有名なのは、次の歌です。

ももつたふ　磐余の池に　鳴く鴨を
今日のみ見てや　雲かくりなむ（万・巻三・四一六）

歌の作者は大津皇子で、歌碑の場所は吉備の春日神社南側の吉備池の畔にあります。『万葉集』に「大津皇子、被死しめらゆる時、磐余の池の陂にして涕を流して作りましし御歌一首」とありますが、辞世の歌です。『懐風藻』にも大津皇子が作った漢詩が収められています。

金烏臨西舎　鼓聲催短命　泉路無賓主　金烏西舎に臨らひ　鼓聲短命を催す　泉路賓主無し

此夕離家向　　此の夕家を離りて向かふ

即ち「金烏（太陽）はすでに傾いて、西の家屋を照らし、時を告げる鼓の音は、死を目前にした短い命をせきたてるように聞こえてくる。死出の旅路には、お客も主人もなくただ一人。この夕べ自分の家を離れて孤影さびしく黄泉の旅へ出立しなければならない」と詠んでいます。

この歌は中国五代の詩人、江為の「臨刑詩」「衙鼓侵人急、西傾日欲斜。黄泉無旅店、今夜宿誰家。」（役所の人の死への旅を促す太鼓の音が騒がしく、西に太陽がいよいよ沈む。死の旅路に泊まる宿もなく、今宵誰の家に泊まろうや、泊まるところがないのである）を踏まえて作られたものです。その歴史的背景としては、天武天皇には十人の皇子と七人の皇女がおり、皇位継承が難題となります。当時、最も有力な候補者は、皇后鵜野讃良皇女を母とする草壁皇子と大田皇女を母とする大津皇子の二人です。共に天武の子ですが、草壁の母である鵜野皇后が天武を助けて政治をとっているのに比べ、大津は五、六才の時に後ろ盾となる母を亡くしています。その点では草壁は候補者として有利なのですが、しかし器量・才能の面においては大津のほうが優れて人望も厚い。従って草壁をなんとか皇位にと願っている鵜野皇后にとっては、大津が目障りで邪魔者でありました。朱鳥元年（六八六年）九月九日、天武天皇が崩御。そして天皇の死から一ヶ月もたたない十月二日、大津皇子は謀反の罪で捕らえられ、翌日には死刑に処せられました。その屍は二上山の雄岳山頂に葬られています。これが磐余の都に発生した皇位争いの悲劇です。その後、都は磐余から飛鳥に移されました。

飛鳥は天香具山から橘寺までの南北三キロメートル、多武峰と甘樫丘・飛鳥川に囲まれた東西〇・七キロメートルの小い盆地にあります。四、五世紀頃、地方の豪族を制圧した大和朝廷が全国を統一しました。六世紀の中頃に日本に仏教が伝わります。この時、都は飛鳥に遷されたのです。飛鳥で聖徳太子は蘇我氏とともに仏教を広め、大王（天皇）を中心とした国家建設を目指しました。この理想は七世紀になっても継承され、大化の改新や壬申の乱を経て律令国家の完成へとつながっていきます。特に広くはないこの地域ですが、六世紀半ばから七世紀末までのおよそ百五十年間、ここに宮殿・邸宅・倉庫など都を形成する建物が数多く造られ、石垣で囲まれた山、巨大な池と瓦葺の寺院、石敷きの道、水路などがあって、奈良時代の最初の首都でありました。『万葉集』では、飛鳥のことを次のように詠んでいます。

大君は　神にし坐せば　赤駒の
腹這ふ田居を　都となしつ（万・巻十九・四二六〇）

大君は　神にし坐せば　水鳥の
すだく水沼を　都となしつ（万・巻十九・四二六一）

壬申の乱を平定した以後の歌ですが、作者は大伴御行。この歌では、六六七年三月の近江遷都から六七二年九月の明日香（飛鳥）遷都までの五年半の間に、浄御原の一帯が荒廃していたことを暗示しています。

二、造都思想と文学

中国古代では、歴代の支配者は、王朝を交替するたびに、その権威と威厳及び権力の大きさを示し、また国をよりよく支配するために、よく遷都を行っていました。殷の都は河南省の安陽、周の都は鎬、秦の都は咸陽、漢・隋・唐の都は長安、洛陽、北宋の都は開封、南宋の都は杭州、元・明・清の都は北京、というように都を転々と移していたのです。日本の場合も同じく、磐余から飛鳥、飛鳥から難波・近江・藤原・平城京・長岡京・大津京、平安京というように、政治情勢の変化や支配者の都合などによって都は移されるのです。但し、都を移る際に、例外を除ければ、殆どの場合は地理環境、即ち風水による場所の選定が大変重視されていました。

次に今日の話の本題、即ち「造都思想」または「都をめぐる文学」における日本と中国との関わり、及び双方の共通点と相違点の究明に移らせていただきます。

日本と中国の間に影響関係がはっきりと認められているのは、まず都や宮殿を造築する際に行われる山川の神を祭る儀式、及び場所を選定する時の自然環境、即ち風水に対する観察が挙げられます。とりあえず、その辺からお話を進めて参りましょう。

後漢の時代（建初末年・八三年）、歴史家の班固は「両都賦」（『文選』に収録）中の「西都賦」で、長安の都を築いた当時の情況をつぎのように紹介しています。

> 漢の西都は、雍州にあり、これを長安といふ。左は函谷・二崤の阻により、表するに太華・終南の山を以てし、右は褒斜隴首の険に界し、帯すに洪河涇渭の川を以てし、衆流の隈、汧其の西に湧く。華實の毛は、則ち九州の上腴にして、防御の阻は、則ち天地の奥区なり。この故に六合に横被し、三たび帝畿となり、周以て龍興し、秦以て虎視す。大漢命を受けてここに都するに至るに及びて、仰いで東井の精を悟り、俯して河図の霊に協ふ。奉春は策を建てて、留侯は演成し、天人合応して、以て皇明を発す。乃ち眷て西顧

漢の西都は雍州にあり、これを長安という。その左側は、函谷・二崤の険に寄りかかり、表には華山・終南山を外屏とし、その右側は、褒斜・隴首の険を境とし、黄河・涇水・渭水をその周囲に巡らせ、それらの流れの曲がり目あたり、汧水がその西に溢れている。華実の茂りをもたらす点では、天下に希な沃土で、険阻な土地に囲まれている点では、天下一の安住の地だ。かかるわけで、長安の地の徳は天地の隅々まで輝きわたり、それまで三度も帝都となり、周王朝はこの地によって龍の雄飛のように興り、秦王朝は虎視眈々と天下の統一をねらっていた。漢王朝が天命を受けてこの長安に都するにあたっては、上の天を仰いで望むと、五星が東井の宿に集まり、よって高祖が秦を滅ぼす瑞祥の兆しを悟り、下の方を俯瞰すると、黄河の中に八卦図のよ

し、ここに惟れ京を作れり

うな神秘な光景が現れ、また奉春君（婁敬）も長安に都すべきことを高帝に献策し、留侯の張良も推し測ってその献策の正しきを立証した。このように天と人とが互いに感応して、漢の高祖の明徳を明らかにした。それで高祖は西を顧みて、この西都の長安を造築したのである。

この記載については、まず三点注目すべきところがございます。

①西都の長安は、嵩山、華山、終南山、隴山という四つの山に取り囲まれ、この四つの山が長安を守る藩屏（垣根）となる。黄河、涇水、渭水をその周囲に巡らせて、風水の良い場所であるだけでなく、軍事の防御にも険阻な要所である。

②長安の周囲には豊かな土地が横たわり、河の水に恵まれ、交通の便もあり、天下一の安住の地である。

③漢の高祖が長安に都する際に、高き所に登って、上を仰いで天象を観察し、下を見おろして黄河に神秘な「八卦図」が現れることを確認し、また臣下の献策を受け入れて、最後に造都の決定を下した。

この三点は、長安に都を築く最も重要な要素となります。

時代が降って七世紀の末頃、飛鳥京に続いて、大和盆地の南部（今の奈良県橿原市）に、藤原京が造営されていました。この藤原京は、六九〇年（持統四年）に着工され、六九四年（持統八年）に完成した日本史上最初の条坊制を布いた本格的な中国風の都城です。

藤原京は当初、大和三山の内側にあると想像され、東西一・一キロメートル、南北三・二キロメートルとみられていましたが、九〇年代東西の京極大路の発見で「大藤原京」が想定されました。その規模は、五・三キロ四方で、少なくとも二十五平方キロもあり、平安京（二十三平方キロ）や平城京（二十四平方キロ）をしのぎ、古代最大の都で、大和三山（北に耳成山、西に畝傍山、東に天香具山）をも内に含む規模です。都の中心やや北寄りに内裏・官衙のある藤原宮を配置し、藤原宮から北南方向にメインストリートである朱雀大路が築かれ、京の域内には、朱雀大路を堺にして東側が左京、西側が右京で、それぞれ南北に十二条、東西に八坊の条坊制地割りが設定されています。

藤原宮はほぼ一キロ四方の広さで、周囲をおよそ五メートルほど高さの塀で囲み、東西南北の塀にはそれぞれ三か所、全部で十二か所に門が設置されています。中国の道教思想の影響で、藤原宮の真ん中に太極殿が置かれ、太極殿の後方に耳成山、南の中央の門が正面玄関に当たる朱雀門で、朱雀門の前は朱雀大路、朱雀門の東は香具山、西南の方は畝傍山、この三山は後で紹介しますが、風水学で言う「鎮座」の役割を果たしています。藤原京を取り囲む地理環境及び藤原京の構成は、長安のそれと非常に似ています。

西暦六九四年、都は飛鳥の地から藤原京に遷されました。そこで、政治の基本となる律令が制定され、都の文化が栄えました。しかし十六年後、即ち元明天皇の時代に、盆地の北端奈良山の南（現在の奈良県奈良市および大和郡山市あたり）に、平城京がまた建設されて、都はそこに遷されます。

平城京は南北長方形で、中央の朱雀大路を軸として右京と左京に分かれ、さらに左京の傾斜地に外京が設けられています。東西軸には一条から九条大路、南北軸には朱雀大路と左京一坊から四坊、右京一坊から四坊の大通りが設置された条坊制の都市です。各大通りの間隔は約五三二メートル、大通りで囲まれた坊は、堀と築地によって区画され、さらにその中を、東西・南北に三の道で区切って町としたわけです。

さて、藤原京と平城京及びその他の都の建造における大陸文化の影響（都城制度、陰陽五行の風水による場所の選定、宮都の構成等）については、これまで多くの研究者によって考証されてきました。王仲殊さんの「日本の古代都城制度の源流について」（一九八三年『考古学雑誌』69に所収）、岸俊男さんの『古代宮都の探求』（塙書房・一九八四年）、日本古代宮都の研究』（岩波書店・一九八八年）、千田稔さんの『宮都の風光』（『日本文明史3』角川書店・平成二年）、狩野久さんの『日本古代の国家と都城』（東京大学出版社・一九九〇年）、高橋徹さんの『道教と日本の宮都』（人文書院・一九九一年）、吉田歓さんの『日中宮城の比較研究』（吉川弘文堂・二〇〇二年）等は、いずれもこの方面の力作であります。これらの論考には視点や考察内容上の相違があるけれども、その基本的な立脚点は、まさに千田稔さんが指摘しているように「古代日本において国家の政治目標の一つとして、宮都をつくるという象徴的な行為が、少なからず意味を持っていたとすれば、具体的な宮都の形にも、その象徴性が何よりも強く表現される。……その象徴的な形を中国大陸の都城にモデルを求めるということ自体、宮都のもっている思想性は、唐文明の影の中にあることはいうまでもない。唐文明というシステムの中のサブシステムとしてわが国は稼働しているのであるから」（『宮都の風光』）というような認識に置かれています。

日本古代都城宮室の造営には、諸先生が考察したように「中国大陸の都城にモデルを求め」、中国古代造都思想の影響が認められる以上、その影響の痕跡は都城宮室の旧地遺跡においてのみならず、都の造営の経緯等を記録する歴史書及び造営事業を称賛する文学作品にも当然残されています。『日本書紀』巻第三・神武天皇己未年春三月の条には、皇都造営の意義を記されています。

「誠に皇都を恢き廓めて、大壮を規り摹るべし。而るを今運屯蒙に屬ひて、民の心朴素なり。巣に棲み穴に住みて、習俗惟常となりたり。夫れ大人制を立てて、義必ず時に随ふ。苟くも民に利あらば、何ぞ聖の造に妨はむ。且當に山林を披き拂ひ、宮室を経営りて、恭みて寶位に臨みて、以て元元を鎮むべし。上は乾霊の国を授けたまひし徳に答へ、下は皇孫の正を養ひたまひし心を弘めむ。然して後に、六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇にせむこと、亦可からずや。観れば、夫の畝傍山の東南の橿原地は、蓋し国の墺区か。治るべし」とのたまふ。是の月に、即ち有司に命せて、帝宅を経り始む。

この文章は『日本書紀上』（日本古典文学大系・岩波書店）の頭注によれば、六朝時代の詩文集『文選』中の「魏都賦」「東京賦」「東都賦」「西都賦」「魯霊光殿賦」「呉都賦」及び『周易・序卦』、『礼記・礼運』中の表現を下敷きにしているわけです。

「大壮を規り摹るべし。而るを今運屯蒙に屬ひて」→「規摹踰溢」（「東京賦」）「既窮巧於規摹」（「景福殿賦」）

「今運屯蒙に屬ひて」→「屯者物之始生也、物生必蒙」（『周易・序卦』）

「民の心朴素なり。巣に棲み穴に住みて」→「昔者先王未有宮室、冬則居営窟、夏則居橧巣」（『礼記・礼運』）

「大人制を立てて、義必ず時に随ふ」→「体元立制、継天而作」（「東都賦」）

「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇にせむこと」→「覧八紘之洪緒、一六合而光宅」（「呉都賦」）

文章に表れている造都思想も、班固の「両都賦・東都賦」中の「体元立制、継天而作（元を体し制を立て、天を継いで作り→天地の始めにのっとり制度を定め、ここに天命を受けて世を治めることなった）」を踏まえているわけで、文章中の「観れば、夫の畝傍山の東南の橿原地は、蓋し国の墺区か。治るべし」は、ほかでもなく都を作る時の場所の選定であります。畝傍山等に取り囲まれる橿原、即ち飛鳥地方が宮都建造のよき場所として選ばれ、そこで都を造る際の光景については、『万葉集』中の「藤原宮の役民の作れる歌」及び柿本人麻呂の「藤原宮の御井の歌」という二首の長歌よりその一端が窺えます。

やすみしし　我が大君　高照らす　日の皇子　あらたへの　藤原が上に　食す国を　見したまはむと　都宮は　高知らさむと　神ながら　思ほすなへに　天地も　依りてあれこそ　いはばしる　近江の国の　衣手の　田上山の　真木さく　檜のつまでを　もののふの　八十宇治川に　玉藻なす　浮かべ流せれ　そを取ると　騒く御民も　家忘れ　身もたな知らず　鴨じもの　水に浮き居て　我が作る　日の御門に　知らぬ国よし巨勢道より　我が国は　常世にならむ　図負へる　神しき亀も　新代と　泉の川に　持ち越せる　真木のつまでを　百足らず　筏に作りのぼすらむ　いそはく見れば　神ながらならし（万・巻一・五〇）

やすみしし　我が大君　高照らす　日の皇子　あらたへの　藤井が原に　大御門　始めたまひて　埴安の　堤の上に　あり立たし　見したまへば　大和の　青香具山は　日の経の　大御門に　春山と　しみさび立てり　畝傍の　この瑞山は　日の緯の　大御門に　瑞山と　山さびいます　耳梨の　青菅山は　背面の　大御門に　よろすなへ　神さび立てり　名ぐはしき　吉野の山は　影面の　大御門ゆ　雲居にそ　遠くありける　高知るや　天の御陰　天知るや　日の御陰の　水こそば　常にあらめ　御井の清水（万・巻一・五二）

まず藤原宮を造営する際に現われた瑞祥の徴である「図負へるくすしき亀」（神亀負図）ですが、これは班固の「西都賦」中の「俯して河図の霊に協ふ」及び左沖の「魏都賦」中の「言占其良。謀亀謀筮、亦既允臧。修其郛郭、繕其城隍」（言に其の良を占ふ。亀に謀り筮に謀るも、亦既

に允に臧し。其の郛郭を修め、其の城隍を繕む）と同じく、京都の造営にめでたい兆候が現れ、亀卜にも好い兆しが出たということです。そして埴安の堤上に行なわれた「地形の観察」、その観察によって藤原宮を取り囲む香具山・畝傍山・耳梨山・吉野山という東西南北の方角に鎮座する四つの山に対する讃美も、班固の「西都賦」のそれと一致しています。

日本古代の造都思想に、陰陽五行の風水による場所の選定、とりわけ瑞祥の出現に対する観察（天人感応）が、造都の前提条件として最も重要視されていましたのは、ほかでもなく中国古代造都思想に対する受容であります。それならば、中国古代の造都思想が何であるか、造都思想の起源と形成及び日本に与えた影響について考える必要があると思います。

造都思想及び造都をめぐる祭祀儀礼の起源については、まず『詩経』中の「大雅・公劉」、「周頌・般」、「鄘風・定之方中」などの作品から見てみよう。

篤公劉、彼の百泉に逝き、
彼の溥原を瞻る。迺ち南岡に陟り。
乃ち京を觀る。京師の野、
于時に処処し、于時に廬旅す。

篤い公劉さまは、百泉のほとりに来て、
広々とした平野を見渡し、また南の山岡に登り、周囲を観察して、
ついに京師というよい場所を見つけた。それで京師の野原に、
都を定め国を造り、家や宮室を築くようになった。（「大雅・公劉」）

司馬遷の『史記・周本紀』によりますと、公劉が后稷の曾孫で、古公亶父の第九代の遠祖であります。「大雅・公劉」の詩は、公劉が十八カ国の諸侯を率いて豳（陝西省武功県）から幽地（陝西省歓県）に遷して、そこで新たに都を作った業績を褒め称えて作った歌です。

於皇たる時の周、其の高山に陟り、
隰山喬岳、允れ猶ほ河を翕む。
敷天の下、裒めて時に之れ対す。
時れ周の命。

ああ、偉大な周の王様、かの高い山に登って、
綿々たる山脈・峻嶺を眺め、百川が黄河に流れ入るのを見る。
天下の諸侯がここに集まって山川百神を参詣し、
周は天命を受け、代代に栄えて行くのである。（「周頌・般」）

「周頌・般」は周の武王が地方視察の際に高き山に登って山川やもろもろの神を祭る儀式を詠んだ歌です。

定の方に中するとき、楚宮を作于る。
之を揆るに日を以てし、楚室を作于る。
之に樹ふるに榛栗をもってし、
椅桐梓漆をもってし、
爰に伐りて琴瑟とせん。
彼の虚に昇りて、
以て楚を望む。楚と堂、
景山と京とを望む。降りて桑に観ひ、
卜するに其れ吉と云ふ、
終に然して允に臧し。

ペガサスが正に南中しようとするこの季節に、楚丘の地に宮を作る。
日の出と日の入りで方角を量り、楚丘の宮室を作る。
ここに榛と栗の木を植え、
椅と桐と梓と漆を植え、
これを伐って琴瑟の材となす。
かの漕邑の跡に登り上がって、
そこから楚丘を望祀する。高き山たる楚丘と、
そこに建てられた京堂とを望祀する。降りて桑社で占いし、
亀卜をすると吉と出た。
さすればこれはまことにすばらしい。（「鄘風・定之方中」）

「鄘風・定之方中」は『毛詩序』の解釈「定之方中は、衛の文公を美するなり。衛、狄の滅する所と為り、東に徙りて河を渡り、漕邑に野処す。斉の桓公、戎狄を攘ひて之を封ず。文公徙りて楚丘に居る。始めて城市を建てて宮室を営み、其の時制を得たり。百姓これを説び、国家殷富す」に基づくならば、都城宮室を造営する際に行われた「国見・国褒め」の儀式を詠んだ詩であります。つまり夷狄に滅ぼされた衛国の文公が民を率いて楚丘に移り、そこで都城宮室を建造し、国を再び復興させたことを讃美しているわけです。

以上挙げました三首の詩は、いずれも高き山に登って山川の地理環境を眺め、神霊を祭り、都城宮室を建造する君主の偉業を褒め称えているものです。特に「鄘風・定之方中」の中の「彼の虚に昇りて、以て楚を望む。楚と堂、景山と京とを望む。」は、明らかに宮室を造営した後に行われた「望祀」（即ち高い山に登って周辺の景観を眺め、神霊の保護を願う祭祀を行なうこと）を詠んでいるものです。詩の中に衛の文公が都・宮殿を望祀した後、楚丘から降って桑社で亀卜を行ない、「吉」の兆しが出たということで、都・宮殿の建設が天意に合し、国家がこれから栄えて行くことを予祝しているわけです。

さて、先ほど挙げました班固の「西都賦」に記されている「仰いで東井の精を悟り、俯して河図の霊に協ふ」は、当然、『詩経』の詩に詠まれている「望祀」の伝統を受け継いでいるもので、「俯して河図の霊に協ふ」の「河図」は、即ち黄河に現れた瑞祥の徴である「神亀負図」或いは「龍馬図」のことを指しています。『尚書・洪範』「天乃ち禹に洪範九疇を錫ふ。彝倫攸って叙づ」の孔氏伝に、

天禹に与ふ。洛より書を出す。神亀は文を負ひて背に出列す。

とあり、『古今図書集成・職方典』にも、

上古伏羲の時、龍馬図を負ひて黄河に出づ。その図の数は、一六は下に居し、二七は上に居し、三八は左に居し、四九は右に居し、五十は中に居す。伏羲はこれに則り、以て八卦を画く。

と記されて、伝説中の古帝が地象を観察して八卦を作ったことを言っています。『周易・繋辞下』にも、

古は包犠氏の天下に王たるや。仰ひで則ち象を天に観、俯して則ち法を地に観、鳥獣の文と地との宜しきを観る。近きに諸々の身を取り、遠きに諸々の物を取る。是に於いて始めて八卦を作り、以て神明の徳に通じ、以て万物の情を類す。

と記されています。つまり伏羲と包義は、いずれも地象と天象を観察して八卦を創り出したのです。その地象と天象は、ほかならぬ土、金、木、火、水という五行の「相生」「相克」の原理による自然万物の変化と日月星辰による天体運行のことを指し、八卦は、これらの自然現象を人間世界の諸事象と結びつけて、万事の吉凶禍福を占い、未来の運勢盛衰を予測するものであります。従いまして、中国の古代人は天上の四方と中央の神を「五帝」として祭り、その「五帝」は、五行と天宮五獣及び伝説中の帝王に当てられ、それぞれ四時を司り、天下の政治を分担させられていました。即ち、

木→東方→青帝→蒼龍→太昊→春を司る→農桑を興す
火→南方→赤帝→朱雀→炎帝→夏を司る→好悪を審にす。
土→中央→黄帝→麒麟→黄帝→長夏を司る→文化を宣ぶ。
金→西方→白帝→白虎→少昊→秋を司る→武備を修む。
水→北方→黒帝→玄武→顓頊→冬を司る→賞罰を明かにす。

この五帝を郊外において祭る儀式は「郊祀」と呼ばれて、『周礼・春官・小宗伯』に記されている「五帝を四郊に於ひて兆ふ」は、即ちこの「郊祀」のことを指しているわけです。五帝を祭る儀式を行なう際に、まず「天」に象る祭壇を設けて、執政者とシャーマンは祭壇に登り、天地万物の兆候を観察し、四方の百神を奉って、風調雨順や五穀豊饒及び天下平安と幸福幸運を祈るわけです。「郊祀」の対象としては、五帝のほかに五星、二十八宿星官、雷神、風神、雨神、山川の神等も祭られています。このような祭祀儀礼は、「方望」或いは「望祀」と称されていて、「望」は、五行と日月星辰の運行状態、その運行状態に象る君・臣・民・事・物の状態、即ち、土→君の象、金→臣の象、木→民の象、火→事の象、水→物の象、日→陽の精→君王の象、月→陰の精→臣下の象、五星→五行の精→五事（貌・言・視・聴・思）得失の象を観察することであります。「天人合応」の理論の根本は、まさにこれに基づくもので、つまり天（万物を司る神・上帝）は、瑞祥と災異を通して、その意志を表明し、人間道徳の善し悪しと人間万事の是非によって、奨励或いは懲罰を下すわけです。漢の董仲舒が『春秋繁露・同類相動』で「帝王のまさに興

らんとするや、その瑞祥はまた先にあらわれる。そのまさに滅びんとするや、妖孽もまた先にあらわれる」といい、陸賈の『新語・明誡』で「悪政は悪気を生じ、悪気は災異を生ず。蜮虫の類、気に随ひて生じ、虹蜺の属、政によりて見ゆ。道を治めて下に失すれば、則ち天文上に変ずる」と言っています。これらの話は、いずれも「天人合応」という発想から来たものです。従って「天人合応」の理論は、人間の思想と行動、とりわけ帝王の人格と執政の好悪を検定する最も重要な基準となっています。そのため、京都造営の際に行う風水への観察、及び造営の後に行われる「望祀儀礼」、即ち瑞祥と災異に対する観察は、歴代の君王に最も重要視される宗教儀式であると同時に、国家政治を運営する重要な依拠ともなっています。しかもこのような祭祀儀礼は、都を造営する際に限らず、都が築かれていた後もたびたび行われていました。班固の「東都賦」の結び部分に付いている「霊台詩」は、そのことを詠んでいるものであります。

乃れ霊台を経みて、霊台既に崇し。
帝勤めたまひて時に登り、
爰に休徴を考ふ。
三光精を宣べ、五行布き序づ。
習習たる祥風、祁祁たる甘雨。
百谷蓁蓁として、庶草蕃廡す。
屢惟れ豊年、於皇に楽胥しむ。

帝は霊台を営造され、その霊台は雄大崇高である。
明帝は時々それに登って、
瑞祥の兆しを観察する。
日月星辰は光り輝き、金木水火土の五行は順序正しく運行している。
吉祥の風はそよそよと吹き、万物を潤す甘雨は降り注いでいる。
雑穀が生い茂り、草花が咲き乱れている。
年々豊作を収めて、聖皇は楽しみを尽くしているのである。

この「霊台詩」の元を辿りますと、『詩経・大雅・霊台』が最も古い作品になります。

霊台を経始し、
之を経り之を営る。
庶民之を攻る、
日ならずして之を成す。
経始するに亟がしむるにあらざるも、
庶民子り来る。

霊台を造り始めて、
仔細に経営する。
庶民たちは一緒に造って、
日にちもかからずに完成した。
霊台を造るのにあせらないが、
庶民たちは盛んにやってきた。

王靈囿に在れば、
麀鹿攸に伏す。
麀鹿濯濯たり、
白鳥鶴鶴たり。
王靈沼に在れば、
於牣ちて魚躍る。
虡業と樅。賁鼓と鏞。
於鼓鐘を論ね。
於辟雍に楽す。
於鼓鐘を論ね。
於辟雍に楽す。
鼉鼓逢逢たり、
矇瞍公に奏す。

文王は霊台の園内におられて、
雌鹿が深い草むらに伏している。
雌鹿が肥えていて毛皮もつやつや、
白鳥の羽も綺麗だ。
文王は霊沼におられて、
ああ、池の魚も飛び跳ねて喜んでいる。
木の枠に太鼓と鐘が掛かっていて、その音は調和して美しい。
ああ、調和の取れた鐘鼓の音。
ああ、文王は離宮におられて楽しんでいる。
ああ、調和の取れた鐘鼓の音。
ああ、文王は離宮におられて楽しんでいる。響く。
太鼓を叩いてその音はボンボンと、
盲目の楽官が雅楽を演奏して霊台の完成を祝う。

『毛詩鄭箋』では「天子の霊台有るは、祲象（災いを起こす悪い気）を観、氣の妖祥を察する所以なり。文王命を受けて邑を豊に作る。霊台を立つ」と、詩の背景を説明しています。つまり霊台を築くのは、不祥の兆しを観て、気の妖祥を察するためです。『説文解字』では「台」のことを「台、四方を観て高き者なり」と説明されています。台を造って天象を観察することは、早くも殷の時代にすでに行われていた。劉向の『新序・刺奢』に「紂は鹿台を為り、七年にして成る。其の大きこと三里、高きこと千尺、臨みて雲雨を望む」と記されています。周の時代に入って、「台」は雲雨天象を観察するために登るのみならず、次第に「望祀」という儀礼を行う場として使われていたのです。「大雅・霊台」という詩は、まさに「台」を築いて周の建国を祝い、「天下安泰」と「万象祥和」を賛美する儀礼歌です。霊台の園内には鹿や鶴がいるばかりでなく、「神池」としての「霊沼」にも魚が飛び跳ねて、吉祥と調和の景観を表しています。詩に登場する鹿、鶴、魚は、いずれも吉祥を表す霊物です。それゆえ「詩小序」では「霊台」という詩の性質を「民始めて附くなり。文王命を受けて民其の霊徳有り、以て鳥獣昆虫に及ぶを楽しむ」と説明しているわけです。班固の「霊台詩」は、もちろん『詩経・大雅・霊台』の流れを受け継いだものです。

次に「四山鎮座」という発想の源流を探ってみよう。「四山鎮座」の考え方は、最初に文学作品に登場したのは、『詩経・大雅・崧高』において

です。

岱高なる維れ嶽、　山の高き雄大たるものは四岳であって、
駿きこと天に極る。　その四岳は聳え立って天に至っている。
維れ嶽　神を降し、　この四岳より神霊が降り、
甫及び申を生む。　仲山甫と申伯を誕生させた。
維れ申及び甫は、　かの申伯と仲山甫は、
維れ周の翰り。　周王朝を支える大黒柱である。
四国に蕃たり。　四方の諸侯は四岳（泰山・衡山・嶓山・恒山）を蕃屏として
四方に宣たり。　天下四方は申伯と仲山甫によって宣撫される。
……。

『詩集伝』では「宣王の舅申伯、出でて謝に封ず。而して尹吉甫、詩を作り以て之に送る」と、詩の性質を「送別詩」と定めていますが、詩の内容はもちろん宣王の臣下である申伯と仲山甫を、四岳に降した神霊として称賛しているものです。ここで注目すべきなのは、即ち四岳は神霊の降る場所だけでなく、四方の諸侯を守る蕃屏（屏障）ともなっているという点です。万葉歌人の柿本人麿の「藤原宮の御井の歌」に現われている四山鎮座の思想の源流を辿るならば、漢代以降の文献より、むしろ『詩経・大雅・崧高』に遡るべきでしょう。

以上見てきたように、中国古代の造都思想は、陰陽五行の風水説を基にして成立し、「天人感応」の思想と結びつけて発展してきたのです。その思想は「望祀文化」と関連して、京都の景観に対する観察が、国見行事として、次第に祭祀儀礼化され、制度化されていたのです。それは都や宮殿を造営する際に行なうのみならず、王朝政治の一環として都城宮殿の造営が完成した後もたびたび行なわれていました。

中国の造都思想及び「望祀文化」は、飛鳥京の造営にすでに現れ、藤原京と平城京の造営の際にいっそう具体化されたものと思われます。『万葉集』中の巻一の二番目の歌は、都に対する観察、即ち「国見歌」として広く知られています。

大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　国見をすれば　国原は　煙立ち立つ　海原は　鷗たち立つ　うまし国そ　蜻蛉島　大和の国は（万・巻一・二）

舒明天皇の歌ですが、歌中の香具山は、「周頌・天作」、「大雅・崧高」に詠まれている山と同じく、天より降る、もしくは天の神が作った「神霊

たる山」です。その山に登って「国見」（望祀）を行い、自然景観に象る「国情」を観察することは、『日本書紀』巻十一に記載されている仁徳天皇の「登臺望国」と同じく政治的な意義を持ち、歌中の「煙立ち立つ」は、仁徳天皇の「烟氣滿国。百姓自富」に相当する表現で、「鷗立ち立つ」は、先ほど挙げました『毛詩・大雅・霊台』中の瑞祥を表す「麀鹿濯濯たり、白鳥鶴鶴たり」に当たる表現であります。

さて、以上申し上げましたのは、中国古代の造都思想でございますが、次に話を遷都に移りましょう。

三、賦と万葉長歌に現れる遷都への賛美と批判

班固の「両都賦」は、漢の明帝永元年間に作られたものです。その序文では、西漢の武帝、宣帝以来の賦の創作状況を概観し、司馬相如以来の賦を「下情を抒べて諷諭を通じ、上徳を宣べて忠孝を尽くす」というに二種類に分けています。賦の持つ「諷喩」と「称賛」という二つ側面を強調して、班固は「両都の賦」の創作意図を次のように述べています。

臣窃に見る、海内清平、朝廷無事。京師に宮室を修め、城隍を浚くし、苑囿を起し、以て制度を備へしに、西土の耆老、咸怨思を懐きて、上の眷顧を冀ひ、而して盛に長安の旧制を称し、洛邑を陋とする議有り。故に臣「両都賦」を作り、以て衆人の眩曜する所を極め、折くに今の法度以てす。

この文章を著した背景には、光武帝の時代、洛陽に遷都したことに反対し、都を長安に返還すべきだと主張する杜篤（とく）が、班固に先立って「論都賦」という作品を皇帝に奏上したという事があるわけです。その「論都賦」で、杜篤は都を長安に返還すべき主張を賦に登場する賓客と主人との質疑応答を通して述べ、洛陽と長安の優劣を批評した上で、光武帝の洛陽への遷都が一時的な措置であることを強調しています。班固は「都を長安にもどすべき論調」に対する反論を長安と洛陽の比較を通して展開したのです。

まず西都の賓客は、「漢の初め頃、都の造築を黄河と洛水の間に企画したが、安全でないため、それを中止して長安に改めた。その原因を聞き、また長安造築の様子を見たことがあるか」と東都の主人に尋ね、東都の主人は「耳にしたことがない。どうぞ、溜まりに溜まったあなた様の懐旧の思い、古を懐かしむ情を全部吐き出して、古の帝王の道を語られ、私の見識を広め、漢の旧都を語られ、吾が心を広くなされよ」と要請します。それに答えて、西都の賓客は、長安付近の地理状況を鋪陳し、都を長安に置く利点を、

封畿の内、厥の土千里、諸夏に卓犖して、其の有する所を兼ぬ。其の陽は則ち崇山天を隠ひ、幽林穹谷あり、陸海の珍蔵、藍田の美玉あり。商洛其の隈を縁り、鄠杜其の足に濱す。源泉灌注して陂池交々属く。竹林果園、芳草甘木、郊野の富、号して蜀に近しと為す。

と強調した上で、長安の殿堂宮室の模様を誇張を極めた表現で描いたのです。班固の意図するところは、もちろん長安の威容を褒めることにある

のではなく、むしろ誇張化された表現で都の豪華絢爛さを描くことによって、長安の貴族らの奢侈な生活ぶりを暗に諷喩し、遠回しに「長安遷都論」を批判したわけです。

西都の長安に比して、班固は「東都賦」で、洛邑の殿堂宮室を詳細に描写するよりも、むしろ光武帝の天下平定と明帝時代の制度、典礼を紹介するのに重心を置き、天子や貴族らの狩猟についての描写も西都のそれと違って「必臨之以王制、考之以風雅」（必ず『礼記』の「王制」に定められている態度で臨み、『詩経』の「国風」や「大雅」「小雅」に詠まれていることを参考にする）と強調しています。そして「東都賦」の結びの部分に周王朝が都を洛邑に置き、その造築の意義を、

増周旧修洛邑、　　かつて周王朝が都した洛邑の増修を手掛け、
扇巍巍、顕翼翼。　　高く大きく、美しく整った都を造り上げて、
光漢京于諸夏、　　都を中国全土に輝きわたらせ、
総八方面為之極。　　天下のすみずみにまでその力を及ぼされ中心となされたわけだ。
於是皇城之内、　　こうして皇城の内においては、
宮室光明、闕庭神麗。　　宮室が光り輝き、宮殿の庭が神々しい。
奢不可逾、倹不能侈。　　奢は度を踰ゆるべからず、倹は侈ることができない。

というように説いて、君主や貴族らの奢侈を誡める主旨を明記しました。つまり班固の「両都賦」は、西漢時代の中期、後期の帝王の奢侈な生活ぶりを貶し、東漢の統治者に教訓と誡めを提示することによって、儒教の民本思想を宣揚したのです。

班固以後、「両都賦」を真似た作品が少なくありません。そのうち、張衡が作った「二京賦」は、班固の「両都賦」を模倣した作品ではありますが、西漢末年の支配者や貴族等の退廃腐敗な生活についての批判は、一段と具体化され、激烈化されるようになりました。

以上見てきたように、都城宮殿をテーマとする賦は『詩経』の雅・頌詩の流れを受け継ぎながら、新たな変化を見せていた。それを要約しますと、即ち、

1構成は主客問答の形を取り、長大作が多い。
2内容は宮殿の壮観だけでなく、自然環境や貴族らの生活なども詳述する。
3描写は豪華絢爛で、誇張的な表現が多用される。

4京都、宮殿などの描写を通して政治的主張及び君主に対する諷喩と諫めを暗示する。

というようになるのではないかと思います。

以上に並べた諸点を以て『万葉集』中の都城宮室を賛美する長歌のそれと比べれば、両者の間には共通点より、むしろ相違点の方が大です。それについては、これからお話しいたします。

まず前に例示した班固の「両都賦」に取り扱われている「遷都」という事例は、日本の古代にも多く見られます。藤原京、平城京、大津京、長岡京という宮都名に示されているように、「遷都」が日本古代においてもたびたび行われていたのです。しかし「遷都」をめぐる賛否両論を題材として、班固の「両都賦」のように西都と東都とを比較し、宮都の描写に政治的意義を持たせ、誇張的な表現の裏に諷刺諷喩または君主を諫める要素を潜むような作品は、都城宮殿を題材とする万葉の長歌には殆ど認められません。強いて例を挙げるならば、天智天皇の「大津遷都」に対して、「いかさまに思ほしめせか」という詰問を投げかけた「近江の荒れたる都に過る時に柿本朝臣人麻呂の作る歌」が、唯一の「遷都批判歌」だと言えるかも知れません。

玉だすき　畝傍の山の　橿原の　聖の御代ゆ　生れましし　神のことごと　樛の木の　いやつぎつぎに　天の下　知らしめししを　天にみつ　大和を置きて　あをによし　奈良山を越え　いかさまに　思ほしめせか　あまざかる　鄙にはあれど　いはばしる　近江の国の　楽浪の　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の尊の　大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここと言へども　春草の　しげく生ひたる　霞立ち　春日の霧れる　ももしきの　大宮所　見れば悲しみ（巻一・二九）

この「荒都悲傷歌」は、聖天子の御代より誕生した歴代の天皇が橿原に都を設け、そこで代々栄えていたことを『詩経・周南・樛木』中の「南に樛木有り、葛藟纍纍（きゅうぼくかつるいまとい）へり。楽只（たのし）める君子、福履（ふくり）を綏（やす）んず」（南に高く繁るつがの木。つたかずらこれにまつわる。祖先の霊は降臨して楽したまい、幸福を約束して下さる）という詩句を踏まえながら褒め称え、六六七年に天智天皇の勅命によって行われた飛鳥京から大津への「遷都」に対しては、「天にみつ大和を捨てて、あをによしの奈良山を越え、都を鄙の大津に移したのが、いったいどのようなお考えによるのか」というように、遷都に疑問を投げかけ、生い茂る春草や霞んでいる春日を以て、廃都となった大津京の荒涼たる様子を嘆いています。

さらに聖地→橿原と鄙地→大津とを対照的に描き、「いかさまに思ほしめせか」という詰問を通して、大津への遷都に対する不可解を表明している部分は、多少班固の「両都賦」の趣旨と通ずるところはありますが、しかし両作品を詳細に比較すれば、次のような相違点がまず認められます。

①人麻呂の「荒都悲傷歌」には、大和の中心地である奈良の都と鄙の地である大津の都とを対比して詠んでいるが、班固の「両都賦」のように西都と東都を具体的に比較する内容が認められません。

②歌には歴代の天皇が橿原でつぎつぎと天下を治めていたことを謳歌しているが、歴代天皇の功徳や業績及び宮都の立地条件、宮都の様子などについての具体的な描写は認められません。

③人麻呂は遷都に対して「いかさまに思ほしめせか」という詰問を出しているが、遷都に対する具体的な批判や論評をしていません。歌は荒れ果てたかつての都に対する悲嘆と懐古の気持を表しているのみです。

④歌の全体は抒情的なもので、「両都賦」のような質疑応答を通して論理・論説を展開するものではありません。

⑤『詩経・周南・樛木』を典故として応用している部分はあるが、歌の表現には「両都賦」のような美辞麗句を羅列し、誇張的な描写手法を用いる部分が認められません。歌は春草の生い茂り、春日の霧れる風景を以て荒れ果てた都の現状を述べただけです。

もし歌中の「いかさまに思ほしめせか」を、六六七年に行われた天智天皇の大津への遷都に対する批判及び六七二年に行われた天武天皇の飛鳥浄御原宮への返還に対する賛美だと理解すれば、人麻呂はこの「荒都悲傷歌」で「両都賦」のように、二つの宮都を詳細に比較し、両者の優劣を並べた上で、五年も経たないうちに廃都となった大津京及びその郤の場所に遷都を決行した天智天皇を批判し、壬申の乱で政権を掌握している天武天皇の賢明さを大々的に頌賛することも、人麻呂の作歌力量では不可能なことではありません。しかし万葉長歌の名手としての人麻呂は、そのように「荒都悲傷歌」を作りませんでした。班固の「両都賦」に比べれば、人麻呂の「荒都悲傷歌」は遷都の是非を弁明して、自分の主張や論理を展開するのではなく、悲傷の感情を表すのにその重心を置いています。このような特徴は、その他の「遷都」をめぐる歌作品にも現れています。

天降りつく　神の香具山　うちなびく　春さり来れば　桜花　木のくれしげに　松風に　池波立ち　辺つへには　あぢむら騒き　沖辺には　鴨妻呼ばひ　ももしきの　大宮人の　まかり出て　漕ぎける舟は　棹梶も　なくてさぶしも　漕がむと思へど（万・巻三・二六〇）

歌の作者は鴨君足人とされています。題辞を見ますと、「或本の歌に云はく」とあり、その左注に「右は今案ふるに、都を寧楽に遷し後に、旧きを怜びて此の歌を作れるか。」と記されています。この歌とほぼ同じ内容を詠んでいるのは、同じく鴨君足人が作った「香具山の歌一首」（巻三・二五七）です。

天降りつく　天の香具山　霞立つ　春に至れば　松風に　池波立ちて　桜花　木の晩茂に　奥辺には　鴨妻呼ばひ　辺つ方に　あぢむら騒き　百磯城の　大宮人の　退り出て　遊ぶ船には　梶棹も　無くて不楽しも　漕ぐ人なしに（万・巻三・二五七）

前の左注を参考にすれば、二首の歌はいずれも平城遷都後に作られた「懐旧」の作。人麿の「荒都悲傷歌」と同じく「遷都」のことをテーマにしていますが、「遷都」の原因への追求及び「遷都」の是非についての論評はまったく認められません。歌の作者は遷都後に現れた荒涼たる光景を「大宮人のまかり出て漕ぎける舟は棹梶もなく」というように描いて、「寂しい心情」を表明するのみで歌を結んでいます。歌の性質は、もちろん

政治的議論を抜きにした「叙景歌」で、「懐旧の心情」を表す抒情歌です。同類の作品として「奈良の故郷を悲しびて作る歌」も挙げられます。

やすみしし　わご大君の　高敷かす　大和の国は　皇祖の　神の御代より　敷きませる　国にしあれば　生れまさむ　御子の継ぎ継ぎ　天の下　知らしまさむと　八百万　千年をかねて　定めけむ　奈良の都は　かぎろひの　春にしなれば　春日山　三笠の野辺に　桜花　木の暗隠り　かほ鳥は　間なくしば鳴く　露霜の　秋さり来れば　生駒山　飛火が岡に　萩の枝を　しがらみ散らし　さ雄鹿は　妻呼びとよむ　山見れば　山も見が欲し　里見れば　里も住み良し　もののふの　八十伴の緒の　うちはへて　思へりしくは　天地の　寄り合ひの極み　万代に　栄え行かむと　思へりし　大宮すらを　頼めりし　奈良の都を　新た世の　事にしあれば　大君の　引きのまにまに　春花の　うつろひ変はり　群鳥の　朝立ち行けば　さすたけの　大宮人の　踏み平し　通ひし道は　馬も行かず　人も行かねば　荒れにけるかも（万・巻六・一〇四七）

田辺福麿歌集に収められていた歌ですが、人麿の「荒都悲傷歌」に比べれば、悲傷より、遷都後に生じた寂しい光景と侘びしい心情を訴えているのに歌の重心が置かれています。遷都に対する作者の政治的見解及び私的意見が、歌には直接的に詠まれていません。読者は歌に描かれている遷都以前と遷都以後の対照的な情景から作者の見方を推察するしかありません。言うならば、奈良都の興と衰という対照的な描写を通して、歌人の「懐旧心情」は読み取れますが、遷都の是非についての歌人の主張と見解は、実に暈（ぼか）かされていて明確に読み取れません。この点では、宮都の対比描写によってその優劣を論評し、宮都の豪華絢爛さを誇示することによって君王及び貴族らを諷喩または諫める賦の作品（例えば杜篤の「論都賦」、班固の「両都賦」、楊雄の「甘泉賦」、張衡の「西京賦」「東京賦」、左思の「三都賦」等）と大きな相違を見せています。

もし右に示した「遷都」をめぐる万葉長歌と賦との違いを、日中両国の「遷都」が置かれた歴史的背景及び政治状況の相違に帰結するならば、以下に例示する都城宮殿を賛美する歌作品は如何なものであるかを検討しましょう。

やすみしし　わご大君の　聞こしめす　天の下に　国はしも　さはにあれども　山川の　清き河内と　御心を　吉野の国の　花散らふ　秋津の野辺に　宮柱　太敷きませば　ももしきの　大宮人は　舟並めて　朝川渡り　舟競ひ　夕川渡る　この川の　絶ゆる事なく　この山の　いや高知らす　みなそそく　滝のみやこは　見れど飽かぬかも（万・巻一・三六）

天武天皇が吉野の離宮に幸す時に人麻呂が作った離宮賛美歌です。挽歌や称賛歌によく使われている常套句「やすみしし　我が大君の　聞こしをす」のような言葉を歌の冒頭に置き、吉野の離宮を取り巻く清らかな山川の風景を描いていますが、離宮の建造物についてはただ「宮柱　太敷きませば」という一句で触れただけです。そのあとは滝の離宮の永遠さを宮人たちが朝夕に渡って舟競い合う川に譬え、山のように高く作った離宮を「見れど飽かぬ」というほかの歌にもしばしば用いられる慣用句のような表現で讃美して、歌を結んだのです。

吉野の離宮における天武天皇の巡幸をテーマとする歌作ではありますが、巡幸滞在地としての滝の離宮そのものについての具体的な描写は認め

られないばかりでなく、歌の主人公になるはずの天武天皇についての描写（例えば吉野の離宮へ巡幸する政治的意義や目的や吉野の離宮における天皇の姿や生活ぶり等）も、いっさい認められません。

この人麻呂の「離宮賛美歌」に示されているような構造及びその作り方は、ほかの歌人が作った都城宮殿の称賛歌にも見られます。例えば、山部赤人の

やすみしし　わご大君の　高知らす　吉野の宮は　たたなづく　青垣ごもり　川なみの　清き河内そ　春へには　花咲きををり　秋されば　霧立ち渡る　その山の　いやますますに　この川の　絶ゆることなく　ももしきの　大宮人は　常に通はむ（万・巻六・九二三）

という吉野の宮を称賛する歌の構成及び表現手法は、右に例示した人麻呂の歌作とほぼ同じです。言うならば、吉野の宮に対する称賛の様式は、一つのパターンとして固定化されたかのように見えます。このような特徴は多くの従駕歌に見られます。例えば、笠金村が養老七年（七二四）五月元正天皇の吉野離宮の行幸に従駕する際に、

滝の上の　三船の山に　みづ枝さし　しじに生ひたる　とがの木の　いや継ぎ継ぎに　万代に　かくし知らさむ　み吉野の　秋津の宮は　神からか　貴くあらむ　国からか　見が欲しからむ　山川を　清みさやけみ　うべし　神代ゆ　定めけらしも（万・巻六・九〇七）

と詠んだ歌においては、離宮に対する描写は一段と主観的、概念的、雷同化されたものとなっています。

天皇行幸に従駕して旅先で作った「離宮讃美歌」は、以上のような特質を見せていますが、新しく造営された「新京」を褒め称える歌は、どのような構成になっているのかを見てみましょう。

現つ神　わご大君の　天の下　八島の中に　国はしも　多くあれども　里はしも　さはにあれども　山並の　宜しき国と　川なみの　立ち合ふ里と　山城の　鹿脊山のまに　宮柱　太敷きまつり　高知らす　布当の宮は　川近み　瀬の音ぞ清き　山近み　鳥が音とよむ　秋されば　山もとどろに　さ雄鹿は　妻呼びとよめ　春されば　岡部もしじに　巌には　花咲きををり　あなおもしろ　布当の原　いと貴　大宮所　うべしこそ　わご大君は　君ながら　聞かしたまひて　さすたけの　大宮ここと　定めけらしも（万・巻六・一〇五〇）

田辺福麿歌集に見える「新京祝賀」の歌ですが、歌の背景には聖武天皇が諸兄の提案を受け入れて、都を久邇京に遷したと言われています。もし賦であれば、遷都の意義及び遷都の必要性を強調するためにも「新京」のすばらしさ及び「新京」を象徴する「宮殿」の威容雄姿を具体的に描写するに違いありません。しかしこの「新京祝賀」を旨とする長歌の場合は、歌の冒頭部分に「新京」（久邇京）の建設地として選ばれた場所の佳さを、大君の支配する天下・八島のほかの多くの国や里に比べて、ここだけが「川なみの立ち合ふ里と山背の鹿脊山のまに」と、いわば山水に恵まれているという点を以て強調していますが、新京を象徴する「布当の宮」については、人麻呂及びその他の歌人が作った都城宮殿の賛美歌の表現手法と同じように「宮柱太敷き」という一句で概括し、宮殿そのものについての具体的な描写はやはり認められません。その代わりに、宮殿

を取り巻く春秋の光景（川が近くて瀬音は清き、山が近くて鳥が鳴き響き、雄鹿が雌鹿を呼び合い、巌に花が咲き乱れ）は、詳しく且つ生き生きと謳歌されています。結局、遷都決定の正しさを主張するはずの「新京賛美歌」ではありますが、歌の主旨はむしろ新京を取り巻く自然風景への讃美にあると言ってよいでしょう。

都城宮殿を讃美する賦と長歌の間に顕現するこのような違いは、もちろん叙事と抒情という賦と長歌の創作方法及び文学性質の相違に起因するかも知れませんが、日中両国の建築構造と風格（中国の場合は煉瓦造りで、人工による装飾的な部分が多く、全体的に豪華絢爛さを誇るが、日本の場合は木造で、人工による装飾的な部分よりも、むしろ建造物と自然との調和を重視し、全体的に質素簡潔である）の相違、及びその相違の深層に潜んでいる発想と理念上の差異も見逃してはなりません。

中国の古代人は、都城宮殿の建造事業を宇宙天体観や封建制度や政治的観念と直結させ、天地を支配する権力の象徴として捉えています。例えば、

『漢書・高帝紀』

夫天子以四海為家、
非令壮麗無以量威。

『史記・秦始皇本紀』

更命信宮為極廟、象天極、
自極廟道通酈山、作甘泉前殿。
……。

（阿房宮）表南山之巓以為闕、
為復道、自阿房渡渭、属之咸陽、
以象天極閣道絶漢抵営室也。

『王延寿「魯霊光殿賦」』

其規矩制度、上応星宿、
亦所以永安也。

というように、都城宮殿の壮麗さは天子の威厳を象徴するためのもので、ゆえに天上の世界に象り、陰陽の法則に合わせて方向を決め、星象に基づいて位置を定め、建造物に星宿の名を以て冠する。その星象星宿の名は、即ち、

それ天子は四海を以て家と為し、（都城宮室の建造を）
壮麗にさせなければ、君王の威厳を量ることができない。

さらに命じて信宮を極廟と為し、天極に象り、
極廟道より酈山に通じ、甘泉の前殿を作らせる。

南山の嶺に門を造って、この宮殿の表章とし、中央を挟んで闕を置いた。
上下二重の廊下を造って阿房から渭水を渡って咸陽の宮殿に連絡せしめ、
天の中宮たる北極星が閣道づたいに天の川を渡って営室星に至るのを象った。

宮殿を造営する規則制度は、上に星宿に応じ、
それ故に永安を保つことができる。

中宮天極星。其一明者、
太一常居也。旁三星三公。
或曰、子属。後句四星、
未大星正妃、余三星、後宮之属也。
環之匡衛十二星、
藩臣。皆曰紫宮。
（『史記・天官書』）

天の中宮は北極星座である。その中の最も明るいのは太一といい、
太一（の神）がいつも居るところである。その傍らの三星は三公といい、
太一の子の一属ともいう。太一の後ろで曲がって列ぶ四つの星のうち、
最も端の大きな星が正妃で、ほかの三星は後宮のものたちである。
天極星をめぐって内をただし外を護る十二星は、
藩屏の臣である。これらを総称して紫宮という。

というようになっています。つまり中国の古代においては、宇宙天体をただの客体としてではなく、至高無上の権威を持ち、理想の模式、天人合応の象徴として認識されています。それゆえ、地上に都城宮殿を建造する際に、理想上の天の世界をモデルとし、星象や星宿に倣って、天門、陽門、閣道、霊台、明堂、東宮、西宮、南宮、北宮、咸池、天街、天苑、離宮などを設けて構築するのです。

都城宮殿の建造に右に例示したような天体観や帝王思想が潜在し作用する以上、都城宮殿を題材とする賦も当然それを反映して、都城宮殿の具体的な様子を詳細に描写することになります。但し、先ほども述べたように、賦の創作には、

①美→「潤色鴻業・宣上徳而尽忠孝」
②刺→「勧百諷一・抒下情而通諷諭」

という二つの側面を持つがゆえに、都城宮殿の描写意図にも、

①都城宮殿の豪華絢爛さを誇示することによって帝王の覇業を宣揚する。
②都城宮殿の豪華絢爛さを以て君王の奢侈を諫める。

という相反する二つの要素が混在しているのです。

一方、日本古代の都城宮殿の建造には、中国古代の造都思想の浸潤が認められるものの、自然風土や文化性質などの差異により、その建造物及び造営思想はすべて中国のものをそのまま移したわけではありません。日本古代の都城宮殿の構造ないし建築風格の根本たる部分は、あくまで日本の自然風土と日本人の美意識に基づく日本的なものであって、中国的なものではありません。言い換えますと、都城宮殿の建造に当たって、日本は中国から有用な部分を自国の風土に合わせて実用的に吸収しましたが、中国建築の様式及びその様式に潜まれている発想上のものを全て取り入れたものではありません。そういう意味で、都城宮殿という同一の題材を取り扱う賦と万葉の長歌との差異、即ち建造物に対する描写と非描写及び長歌の自然風景への傾斜を成した原因も、以下に並べる諸点によるのでしょう。

①日本古代の都城宮殿は豪華絢爛さを誇るよりも、建造物を取り巻く自然風景との調和を重んずる。

②星宿に倣う建造物の豪華絢爛さを以て天地を支配する君王の権威を象徴するよりも、木造建築物の「核心」とも言える「柱」を重視し、それを以て政治の中心である天皇を象徴する。

③建築風格の相違及び諷喩諷刺の文学伝統がないがために、都城宮殿の豪華絢爛さを描くことによって君王を諫めることも当然認められない。

以上によってお解り頂けますように、同じく「遷都」または「都城宮殿の讃美」を題材とする賦と長歌とは、実に大きな相違を見せています。その相違はただ賦と長歌の文学性質上の相違を意味するだけでなく、中日両国の文学思想乃至その文学思想を醸し出した文化的土壌の相違をも意味するものではないかと思います。その点に関しては、別の機会でお話しいたしましょう。

長らくご静聴頂きまして、どうも有り難うございました。